掌中其角鼓句集 二編 全

掌中其角發句集

春之部

鶯の初声聞れぬ日ハなし　江戸の春

世の中ゆふも梟を吟のはるか

明る夜乃ほのゝとしら雪　うきゝ

元日や月見ぬ人ぞ格子おと

庭竈牛も雑煮を居りきり

春王正月老

生死をむすぶ男女と水いそひ

福禄壽の賛

ちよの日や年玉ふしちの新法師

飛鼠入懐乃夢をひらきて

引つまこく松とらくる嵐の郭

松のちやまつさえ春を待るへく

花さのえ岩ち尾上の春おろし

とくとくも新水白へ新ちつ那式

七種や物ぬ不鶏乃まつ〻そと

二人静のかやとの年

なつ〻ち扇ふ川城能ちの

うつの毛者妻ちふ里の新菜

河州八尾妖そちり

うちもくひやうつの水咲る芹弱花

春の水かろく能去の毛ぬはらす

ちくま川春ゆく水や鮫の髄

四十の賀しける家にて

清秘蔵に墨を出しまゐらせて 梅見けり

花の枝めでたきころの緑なる梅

等躬あれさ川

やさ孫秋のほうちかんの上六梅の袖

百八のかねて遂よや霜のうち

三日月の命あやうし雪の梅

ながし庵まくら

鶯が子ハ子規りけり 三ツ鳥居

宇多院の手摺出るよひなさの之き

うらひまに眺望し きりくれ

市隅

作とあるく雪来る里 竹庫庵

うろひ春の嵐ちり牛く 国の里

傾城の讃

青柳乃 郷哉 櫛や 三日月
青柳乃 蒲鉾つくる 夕べ也
柳ゐを 鼓もうつる 要もうし
探丁や 雪見の曲 ひくふ 狙
ふゝ 魚の留 有 ひかるかも 雀れ
月水や 何よりまず 清苔の味
一升ハ ゝ 文 徳うり 現 よれ
乃考も 小機の 水も 吹たてす

苔代や 雪ハ ひるかも 吹つゝひ
格枝 絵 合よ
ゝ 斯 釜 ふゝ 稲荷山
数入や 一 ゝ あるゝ 文 義
文考 遠 の 振 ゐ
白河の関 年 見 ゝ 此 の 月
惜春
惜ちるや ゝ と 貧よ ん 風巾

をくるしけれ共雪の水
數號のうれ遠郡の居住間く
一樽よ玉子を送る人有
けるとも雪ゆえ玉水 十とせ
杉起く 畠ゆえ 雪ゆえ
蓋きんて不二のうくるを肥う
足めるゆつまうふ猫や雪の中
猫ゆえのうん引やまう於塩ゆ

候砌り國抽人とまめ奏しとうり
所老婆うあ大原の里ひるを
酌しめうく壹人於僧よ諸のうり

菜苑

黒於麻うくうゆめんぬう 云 茅
所亂のおまとそうんうくし
寄於ゆめうかう面
傘や 藪ゆん 於乃ゆ里ゆ

ねふる燈籠とかく何紙する身を

無車馬喧

夕日影町中有らふ胡蝶うれ

蝶とふや猿とともひこむ京屋敷

釈菜

聖堂よこ戸ぬく燈の花ぞ

菊子やあうり陰ゐの巻ゐ新

山路をよ乙鳥とのへす入日かな

菜の水よ蕓るおとそ里つと先

砧子うとふさに及ふ乙鳥ゐ

人うやし雑紙とう受る大のこゑ

帆けた舟のとうとうおろす雲雀ゐ

渉茅川浚舟

川上を夢うう先うゑちとう

緑豆の形もちろし　桃乃眉

燕子　ちちゑらきとや屋の桃

勝尾をひらき寒乃清水の
岩嶮の路くらぬわしの
曲水の筧まうまに宿をえ
おはらの木鬼もたり雛社会
伴へ来てひなのたくや延喜陵
孫ゝをそねひとりの雛子負
ひなの片ま宮移ゝ小内ゝ
紙雛のさうゝしさよまさと

河内さんの桜花をたづねる人す
下卿平漢味又せよ志ほさる紙
墨染又鶯彼片ゝいつかこちらん
月代ひる孫をまをまを糸ちゝ
浦人の花代ゝをふゝ
ちる時を斗又買ん磯さゝ
花中尋友
餞別ゝ人をまつゝを山ちゝ

山さくら猿蓑ゝ支僧めくん
やまさくら猿蓑ゝ支ゝ梢うな

石河氏宜雨公ゝ山荘ゝ

二ゝ乃ゝ角豆うゝ夢さくら
ひまなしの絵持ゝし　山桜

目黒松隣ゝて

浮世ゝ杯梦ゝ支ぬ山ゝ
小坊ゝ松ゝかゝゝ山ゝ

永代寺池ゝ

池ゝのむ犬ゝ入おのゝ形の新
ゝるゝゝゝ花ゝ間のせのれゝ

上野ゝ

ゝゝ徒士ゝゝゝゝ乃ゝ支ゝ
酒ゝ妻ゝ杯ゝ妻ゝ形ゝ那
ゝ支ゝ形ゝ幕の内ゝ
屋形ゝ花ゝ女中ゝ乃ゝ

行露公年〻老て遠うれい
郡城坊に使者の来るを
見て下けるやりうひとり寺にあり
苔よ徒はきこの文人喧嘩買
客すきや孫とも浮義を
海棠の花のうらはやおもろ月
山吹に黄玉青玉　春そうな
月ろう〻山吹花の素朴よし

湖春城いろ〻
浪〻ともむ短尺もあと苔を夢
宰府糸詣の舟中
菜の花の小坊主角なり亀
こう孫ちさ所新ぶんを岩はし
赤是ちり木屋一見ぶんはしし水
南村千調仙臺へ加屋新よ
切ち喜や猪口と雄島よりもれ貝

夏之部

卯月八日母よりおくれて

ゆかしらぬ衣うきぬ卯月哉

ぬうらくやたゝ手まさぐる袖ころもの

法師も戸の下茂り更衣

後年や犬もさゝのくれきた

夜這星鳴ける蛙や子規

歴くや下馬のそりふし時雨

百間長屋にて

時雨人ぬつゝ月よ下駄打

ひやくなす一二の橋出秋時雨

阮咸や三味線ぬしたゝし郭公

寮坊主のまねて淋し子雉

たゝ孤き蓑ぬ見る時雨

夏ゝ来る母屋の屋そう郭公

おとゝ蓑や嵐手むれ蓑

子もふアすり枕も始まる蜀竟

桑名にて

蛤蜃やうれる事形くやかるとれす

それよりして赤坂の鳥やはるきた

陰濡れ雨不奇なりかるとれた

人間の月ふ始まれ和となた

月消く猿の月けれ風やかるきす

子規きく百明鳥きうぬ義

帆とおろ人毎を松魚う磯かるれ

鯉荷鳥鳴ふを巳日の道者なる

浅野家義士墓を詠む

沢潟鳥雑を引ちりかをつハる

杜若鳥人ふ為ふ事てを

かきつばた女雲鳥かるりり

むらさきの蝶もあり杜若

ものしれ花朝精をの凋を

笋よ作りなれく丈あり雪

大町亭法會

法のため筍羹四もかゝる

寄幻呼長老

老僧宮筍をこのむ ちゝみさゝる

ゝゝ年や鞍ゝ わゝめる箱根山

常念仏 うゝゝや浮世夏 念仏

みゝゝ秋や釣るまの乃網屋の声

木賀入湯の頃

ちはゝゝや苗ゝうゝふ ちる門

田植まゝく 水茶屋する角田川

念仏 ゝゝ友と形ゝ人き田植ゝな

ゝゝ姫の懺甲や庫のゝゝ

懺ゝゝ 長者ゝ美や 美牡丹

きる手元 ゝひ見ゝ ゝゝ乞めやめ

根合や 法花ゝひゝゝ 花 笹

廻文

けさたんとのえんや菖乃冨田酒

蝙蝠出屋もふになれあやめ葉

粽うん訳こうめて紙のあり

ちまきなまかたうや葉の紫分縫

午の重午の月午の日午の時うけホへ

競馬　将ヲ入方のいさうあ

月月ホやうく吉兆と出ぬし

月月の酒匂ふくさる初茄子

腰越

篠すゝきを賢斗と数森の月月

傾廓

八ふ巻やちのさまるまい虎う雨

風ふうぬ雲のたゝくやかまこう

吐ぬ籠のほもゝよりの巻籠

杜國城ひさむ

羽織着て帰る時 名古屋 鮓

朝日丸七里出る

湖舟鉄丸酒たりて

買之の鮓のすしうみわたれ式

飯鮓乃鱧なつのしまみやこ式

文月と四ツ月ふいたの出の那

夜川丸蕎麦仕出す美子式

ゑ清水 酒のさかれよ這ゑり

壹ゑゑゑゑゑのゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑ

妾ゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑ

伝流へまゑゑゑゑゑ人式俳句

梁の蝿式おゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑ

蝿ゑゑゑハ一芸ゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑ

逐欧陽公賦

蝿の子式兄ゑゑ舜ゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑ

蝿ハ名のりゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑ

一晶の菴坊うく
日蓮よ 床すゑ蟬の鳴ごゑを
空錫よ 吉原をよく祈祷うれ
ゑ手や 錫も 有も めうとの
濤うう 祈床ゑ むくむや ちちの毒
うりをの 路よ
夏 毒乃 碁よ こうれる 命うま
ゆうう 白ふ 毛さ 実さん 陳皮之

望相州

ちちん子 よりくは うり日う照れ
ゑ家や 石菖 ちり 賣うれ 價う祇
祐天和尚よ ゆすす
夕貞 ちり ゆうを かを 賣名号
ゆふの ゆや ゑき 雞 垣根うり
酒 滿
葛ゑ家の 酒典 子も 二面

藻の花や金魚すの枝いと簾

霊夢に感じて東湖弁戈天に詣ける

出ぬ柔屋に歎うもてもそちまうる

荷切やトまめ〳〵切た芝と角

森てうと〳〵堂てけてふ鉢ゆ〳〵

滝雲に香ふ杉乃めしや知恵山

亀毛に餞

うりの皮やとてかさりかさり

秋風にこのうるうる瓜のまつくら秋

ひし瓜やうつむきて手に蛍小舟

うう〳〵森や柳蛍ふ仏くる去月かし

樟脳干代に代ゆ栄の鐙家

雨乞もそのふかうう

夕立や田を見めぐり弘神まで

ゆふうちに学るめ〳〵く鳴音う船

夕たちや家とめうう雷家鴨

高圖挽涼

香薷散犬う移ふりて雲の峯
西行と武蔵坊とを清水哉
元角田川午田ふかふ雨うく
いとゝ清水ちりけりを前橋
清濁の判後をといはれて
此端を一荷ふ氷哉
乳の先を清水うすとの祭哉

加ふくうゝく
山後ゝ新出ん稲のかりさう哉
端ゝけの棚干めつし星ハ小
侍の節ゝ持しし扇ゝ
朝比奈の乗屋へしめつさう哉
すゝゝ系泥めりなひし避うち
涼住む安房やゝ上総ゝ舟を浦
子人ゝ手伝棚干や稽古

人まゝ暑い部あり けり 芭蕉

自棄

たうもめそ 起ひるゝ 夕すゝみ

菴の留守

すひつゝ人をこゝ小夏乃 蓑 俤

谷宗 木の鬼をおそれそうり 笛

市中の光陰ハ ことさらに いきかき 城

秋なゝ 太鼓や 蓑 祇 乐

秋之部

詞書暑

空や 妹 蚊屋 城 壁 七多羅樹

月 雲や 霄 暁 ゆ 高 見

あ 合や 女 ゆ 歌 見 む

星 あひや あ 何 ゆ 言 燒 苑

比 殿 ゆ

あ あひや 雙 林 塔乃 玲のおと

霧橋やまのくもを宇治の星蟬も
あつた川ちくさしや一声あり
大切の歌を吟るとりての川
葛花や角豆も星ち玉ろ花
吟星や歌て蕎麦ちくろ
七夕歌長し竜の笛
引水て数あくとりて琴ふ傘
水の操ひと繁ちくく出ちさ雲

松たくを咲のとくちたとん出まりて
あさの出ハ仙洞様ハ いのちの那
松貞て志ほれし人や賛帽子
あさ夕ふ小川宿出し 御使
弾曽て雷朝負ふいさ
何さかふ松日法まさあり中老女
増上寺晩景
る老ぬ鶴籠使出さしる亀

右二句文有畧

むまつり門の乞食出　親と共

きちがゝ人や篠の角まつり

初経やこゝろあるかなたの水

生霊酒ゝらぬ親父の那

親もゝもきゝゝ張や蓮う

分郊原

みそゝゝや分限ゝゝ能髑髏

ゝゝゝ富ゝ酒ゝゝん

伊勢の冠見ゝしゝゝゝ踊う那

お撲素ゝ髪月代ゝゝ色の那

神のゝゝゝ女もゝゝ那ゝゝ札

稽さゝゝも逆櫓も色ゝ大喪

妻ゝゝゝゝ後子ゝゝゝゝ人ゝ

いゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

石蔵寺對僧

多小提し茶瓶やさめて苔ふる雪
雪ふるもゆふ茅うら原へ　あら菜屋
雲沙烟り月ゆ忘かゆてすゆの浦
　を里小野の忠守ゆ　ゆまつり事
雪雨雲尾芦うゆものよ　朝ゆけ
めさゆり年一の雪ゆ　波ふる音

曉松亭

獅子蟲の胸ゆうゆれ庭の萩

ゆさうや雲花扇夢を不二風
弥陀の月ふる城のもりゆ　ゆ
なにしよこまつる結弥
夏ふるちよ杉子ゆ　ゆのつる嵐ゆ
杉子のうをけるをとゆ　ゆ
つゆゆやもみ風ゆ　ゆ
ももらし　法飛ふる蘇
鶏頭や杉ゆ　ゆ　清閑寺

[illegible]

[illegible]

西瓜[illegible]奴の[illegible]乃かたれもり

やとり畑の芋[illegible]やとり　伏猪[illegible]

涉茅[illegible]

[illegible]

亡父葬送場[illegible]

一[illegible]

[illegible]

酒[illegible]

詞書と畧す

陣中[illegible]脚をなくや[illegible]の夢

順撿[illegible]の[illegible]や百舌[illegible]声

餞秋[illegible]

諸[illegible]弱[illegible]

仁[illegible]の[illegible]山[illegible]やわらひ[illegible]

小[illegible]

四十の〳〵小秋の中山五十の〳〵ノ

中村少長支婦連そて上京の時

山ゑも人ゑう〳〵やむ猿蓑ゑれ

はハ〳〵もおるの法〳〵笑かゝ〳〵

麻の一茎とゆふ小哥のさんよ

文のことゞ徴すはそ也て荒のこゑ

さゝ〳〵ゑや孤きこゑ此なのゑれ

蓑ゑ山 達なとゝ〳〵の中〳〵

寂蓮

和哥の骨槙〳〵の山の松の色ゑ

あ〳〵ゑ雲尾上の杉をゑれまゝ

点取ゑおこ〳〵る懐紙のあくゑ

二老不目七ゑ戸〳〵しゑる砧の形

みの孫ゑ入〳〵

〳〵ぬ〳〵きゑん孫ゑ屋敷 志津屋敷

紀川ゆくせもゆり

たつの弓矢引あや　三日月
泥水も七分ホあり　宵の月

雲井よりあらはるもの画よ

傘持ハ月より後るゝすのこ也
小ゝのり船に乗月や　昭石潟
めつらしく

更ゝと祢宜の鼾や　杉乃月
月出ゝ雲吹ゝむく　小舟哉

遊子

いなづまや松のかなしも江戸乃月
屠帰や弓弛ばゝれを　昏乃月

長柄文臺之記

かゝる月もむかし弦檜の朽目哉

仲麿画賛

月影や舌を帆よまく三笠や戸
月をそゝれ越路の小者　庶子の下女

とゝまらぬ波ふ茅屋守る高殿哉

満百

ありあけの月ふかたゝりり冊子新歌

在明や待歌かたゝる君と伯父

所思 京にて

いとゝぬるゝ三つ屋敷月

鯛を茶を江戸よりきれてゝふの月

きらゝかの戸さゝもゝ降り者ふの月

平家語の遅風ふ

宿ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ稚ゝ〳〵ゝ月見ふ

ゝ〳〵風んゝ九盃ふゝ月見ふ

葉ふゝひ蔭へ新人ゝ

名ゝゝ皺ふゝひ世話

めゝゝゝや人ゝ抱ゝ紙膝ゝゝ

鐘声客船

やへきりや御堂の太鼓ゝゝゝ雪

名月や古くも葉よ屋敷に
めさうの童よ扇こうもる画よ
寒寺の仏丈ものや栗一つ
山川や古き名よ毬ちるうう
吟の栗よ袖ぬき猿の形もあり
栗賣の一言寒へ寺宗居る船
嵯峨遊嗜
清滝や古ふ柳さらさら氣こころ

種竹三竿
作ぶ名許由ひさまきまし
茸や市幸のあれ眉つくも
茸狩や山ふかるよ虚労病
鳳来寺の山ぶ色とる時
冷泉の珠数ゆ茸の船
松の葉糸七の火先ふ薄雪油
川芎ぶ香ゆ谷出水

笹ねこそ數を無さる葉の中
麥蒔ふ稲干さる無手殘ル
太郎二所の貝をとりく
かゝ出ぬ貝ふのくちす新酒哉
なをうゝ鹿もみるゝん鳴子曳
七十の腰もそゝすうちこ引
雉の下繋つゝりり菊のこく
いさぬけの庭や陀摺菊乃花

荷兮ら後者短冊ゆうた
土器の手こゝ見をやるの菊
きふのさく小僧こちらを片さ好
きく子香や瓶をり乃新水年迄
必雛ぬ碁石ふりぬ紅くの寿
雨をし泥ふ這ふ業を先ふん
こハ詩よ函の子をり出袋きく
三島こて重陽

門酒や　百屋ちきの業式　そば
宮川　おんなりよ　酒造　ちきれて
重箱　花　ちきの　壁業式
女の子　ねひくまつける人ふ
かよ屋ふうらふ　業の　妹　那
親　蜀　十日のさく　城　ひてり
震　妾の　ちもかとよ　菊　膾
翁　ひ　業の　交むり　伊　ちり

のちの月　曙　ちきも　日　傘
白　雪の　蓑ぬく　ちり　後乃月
いつも　古人　ちのふよ
浪の月　松やさ　江戸　庭
ちく子　ちくよ　ちく　後の月
家こわつ　木　も　ちし　乃月
三条橋上
片腕　ハみや　ちのこ寺　菓の那

もゝちよハたうをしへる　酒のかん

山姫や　深みゝ流　さゝちゝ

菅根

杉ゆゑ　人ゝ　ゝる　村　雨

ゝゝちゝる　宮家の子　ゝ　山

大山

腰　押や　ゝ　ゝ　岩根　下　ゝ

山　ゝ　ゝ　ゝ　面や　初　ゝ

うゝの山の法よ

笈の角　樹　菅　ゝ　ゝ

白扇倒懸東海天　ゝ　句　ゝ

代頂　対　ゝ　ゝ　ゝ

ゝ雲の西　切　屋や　普賢不二

怨国離

傾城や　小ゝ　ゝ　九月尽

ア　虫　ゝ　ゝ　ゝ

冬之部

玉津島あるく

法岡居士中おくなり玉つしまの
外宮旅酒勾参詣と並よりり

遊金閣寺

八重垣 楠の板戸ゆるられ
蓑を乾く 鶯すすめ夕時雨
むらもみぢ三稜の近きひかり

宋八幡宮さ那らし三の那
祢鳴かんまとふ雲の那
今熊野ゆらるなるなるしら
ちるかるるかるさのまり
忘るるや切りし厠ひとつ松
ありしかき人をひ出る時面影
猶忘れず茶筅中ゆ花忘れ
ふるしや神ちるき山ちさめ

霊山のこちらあるく
かアきりの尋常有死ぬ枯野のれ

西濱

松一木乞食の釈迦のかゑ姿
捨人やわくこの片うゝ冬飛や
燈籠や汝何とふ名金のうゝ
鶴更老父七十の賀ゝ
永川名浪とのくえや相火桶

すゝかアや燈籠ぬぎえ猿の声
蛇のうつを見とゝ置みして郊名と
名つ事くるくよりて
炭うゝ炭こそ炭こそのれこゝ名
幻住庵所て
雑水名出名出名水すゝ冬こゝ
霜月朔日の例を
法人や嵐芝居を冬こゝ

影見せや　曉　いさむ　下邸橋

山ちの霧のあらぬ月をし

ゝ川や　代　すゝ　笠の原

立厩

夜杭の足下をかきんとすめ

ゝ　ゝ　ゝ　山子にとる　烏ゟ

深もの　波子　ゝ　矢ゟ　来弓

絶ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　義の冬

胡ゝし馬の目ゝ　ゝ　つきん　ゝ邸

柯永老人の手ゝ

山茶花や　猫も　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

日本の風呂　ゝ　ゝ　比叡山

かゝ汁　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

冬暮

茶の湯　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

茶つゝて　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　納豆汁

不昔乃　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　水の音

山犬を[illegible]嗅[illegible]寺[illegible]
蝶[illegible]の白ひのこるや[illegible]の業
[illegible]の[illegible]七日市
みそれ[illegible]あ[illegible]へ[illegible]り法乃鶯

宿僧房

[illegible]の[illegible]の打麦り冬菜哉
[illegible]へ[illegible]衣柄の[illegible]
武蔵[illegible]の[illegible]の[illegible]

鉄炮[illegible]れと[illegible]や[illegible]と汁
[illegible]の[illegible]の[illegible]の面
[illegible]太[illegible]古簾

貞徳翁五十年忌

帯[illegible]の昔か那
[illegible]夜八[illegible]虎[illegible]許
[illegible]釜[illegible]浦ちとり
[illegible]日和[illegible]月[illegible]島

十石峠　鷺小法師　形り　鈴安寺

扨度の外　鶴の毛を引抜んと

鶴の毛や　鷺の　衾　道　さげ

春さめ乃　袖ぬらす　波のうのめこの松

ひとり　雲のたゝ　るとも　思ひたゝ　ぬく

たまと　あら　孫　組　もんと　里　外　東

秋　外　東や　鳥　息　ちろき　面のうち

たり　雲　ゝ　式　小　夜　ま　何　ゝ　そ

和　ま　八　盆　ま　ま　ま　な　ま　の　那

和　ま　き　や　ち　ま　ま　る　人　を　徙

ま　ち　白　や　那　ま　の　く　新　ま　色

ら　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　霜

ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま

半　鈴　の　湖　崎　も　ひ　り　や　ま　の　松

鴨　川　ま　鴨　を　狭　鶴　て　ま　ま　家

軍　兵　衛　岩　ま　て　ま　ま　や　ま　つ　て

秘蔵の鶴の羽くろ紙をしめる人よ
黒漆りゝ唐帛や　雪うりら
乳あてゝも　月雪のうきき酒の味
雪に見えかまもも蘇鉄の女ゆり
不分當春作病夫
酒ゆゑと病をさゝやるゆ　陳之外
極密
さためらの遺精もつゝし雪の水

仔勢稿をまぜめを陶と鉢　設
雪金俳稽をこゑれ行とうも
蕉暮ハひゝきの離や　雪道も
蕉季ゆやはをこちゝれらさし雨
忠信ゝ芳野あまひや　煤えゝひ
鼻ゆ掃　孔雀弘玉や　煤ゆゝり
雪雪雪　明日餅　餅はゝり　と我腐り
餅を乳や　行ゆ　　腐ちの　かゝ

弱法師 ひとの門 西行法師 鎌倉札
象ヶ鼻 松ヶ崎 市弥陀ヶ原
もくもくの 駱駝評定 秋田まち

三条西実隆尼の自画賛

今出川 園十郎 鬼婆 外
書写 夜の雲くもちのし 得方丸
法華経より 破戸をかたへまりて
飛びつと ちりて 小豆とりはれ

俳諧集艸第六集

掌中其角發句集 二編

江戸本石町十軒店　英大助